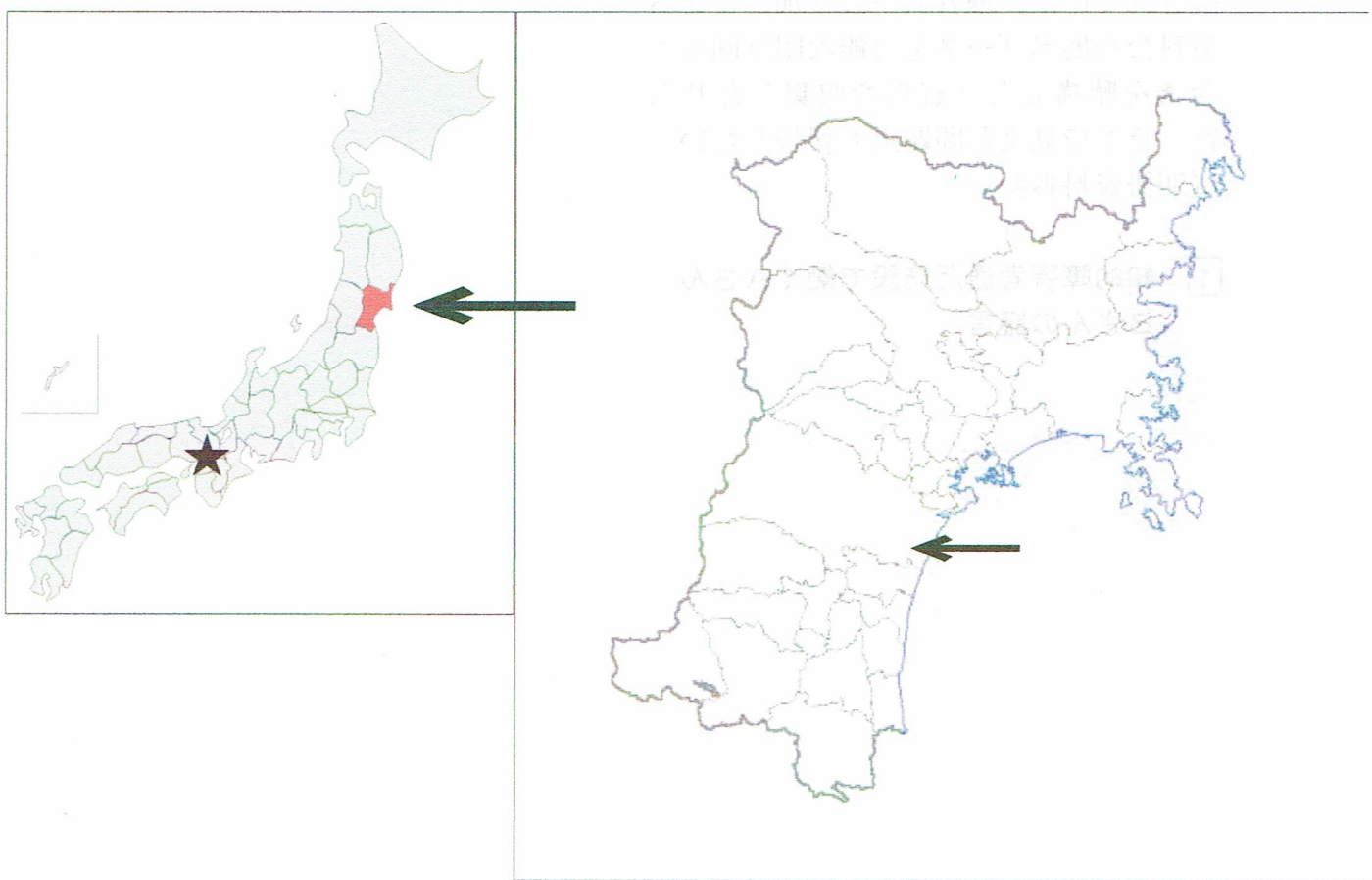
東日本大震災と障がい児・者の状況(5)

～大震災から４年～

高橋 誠

（注）分科会名称は「障がい」を使用するが新聞記事などはその表記に従って，「障害」とすることをお断りする。



はじめに

この報告は 2011 年福岡大会，2012 年千葉大会，2013 年大阪大会，2014 年東京／関東大会の続編である。

これまでは 2011 年 3 月 11 日に起きた東日本大震災で，障がいのある人や子どもたちがどのような状況に置かれたかを，聞き取りと地元新聞（主に『河北新報』）の記事で構成して報告してきた。2011 福岡大会、2012 千葉大会では時系列に沿って出来事を並べていった。大震災から数年が過ぎ，報道が減ってきたので 2013 大阪大会，2014 年東京／関東大会は，いくつかの課題ごとにまとめて表してきた。

しかしながら，震災と障がい児・者をめぐる新聞報道はめっきり減り，復興ムードを盛り上げる記事ばかりとなっている。そこで，今回は地元で開催される宮城／東北大会ということで視点を変え，

東日本大震災を経験した知的障がい者（福祉施設で働く方々）を分科会のゲストに招いて直接質疑応答を展開しながら証言を聞き取ることとした。

また，2015 年 3 月 14 ～ 18 日，国連防災世界会議が仙台市を会場に行われた。参加者は 3 万人とも 4 万人とも言われている。その中で震災と障がい児・者をめぐる経験や今後の防災対策なども討議されていた。筆者も一般参加ができる分科会や展示ブースを可能な限り回って会議を聴講したり資料を収集したりした。そこで見えた問題点も報告したい。（別冊資料参照）

1 知的障害者通所施設で働くＡさん，Ｂさんの証言

2 国連防災世界会議と障がい児・者

おわりに

今回のレポートは，新聞報道を時系列に並べることや課題別にまとめることで筆者の考えを述べてきた従来の形式から，直接，知的障がい者から震災についての聞き取りを行う形式をとった。そこでのやりとりを後日まとめることに加えて，直接聞き取ることの是非や課題は分科会参加者の声を分科会の期間中や終了後に収集して完成させたい。